愛するという事　　エーリッヒ・フロム著

~第一章~　愛は技術か

愛に対する誤解

愛とは、運命的に実現する物である、と社会では広く考えられている。しかしこの考えは誤っている。このような考えには三つの前提がある。

|  |
| --- |
| 人にとって重要なのは、愛する事ではなく、愛される事 |
| 愛する事は簡単だが、愛するに相応しい人を見つける事が困難 |
| 恋に「落ちる」ことと、愛の中に「とどまる」事を混同。 |

* 第二の謝った前提が生じた理由は二つある。

|  |
| --- |
| ロマンチック・ラブが広がった為、愛した人と結婚する事を人が求めるようになった。 |
| 商品市場の発達 |

愛は技術である

愛する事は困難であり、失敗を経験する。然し愛する事を止める事はできない。そこで、生きる事が技術であるように、愛する事も技術であると知らなければならない。

〜第二章〜　愛の理論

1. 愛、それは人間の実存の問題

人間の孤独と無力感

人間は動物と異なり、本能を欠いた、不明確、不安定な世界に、いる。彼はこれにより、孤独を感じ、自然や社会に対する無力感を募らせる。この無力感を克服するために、彼は外界と繋がりを持たずにはいられない。

孤立感から逃れる方法———愛と実存

孤立感から逃れる方法は三通りあると、フロムは記しているが、実質的には四つであると解釈した。そしてどの答えを出すかは、ある人間が個人として、どの程度独立しているかによって異なる。

|  |  |  |  |
| --- | --- | --- | --- |
| 集団的興奮状態 | 集団への同調 | 創造的活動 | 愛 |

上の四つの方法の中で、唯一愛のみが、完全な一体化を成せる。なぜなら愛は、人間同士が、確固とした自己、個性(乃ち実存)を保った侭の結合を可能にするからである。

愛とは

愛は、実存を保ったまま、他者と結びつくことを可能にする。それでは愛とはどのようなものなのか。

|  |
| --- |
| 愛は何よりも与えることであり、もらうことではない(P43) |
| 愛とは、愛する者の生命と成長を積極的に気にかけること(P49) |
| 「秘密」を知る為の(略)方法が愛である。(P54) |

愛は、能動的な活動であり、それは「与えること」と表現できる。そして愛を以て与える物は、まさに自分自身、自分の生命である。自分の喜び、興味、理解、知識など、自分の中に息づく物のあらゆる表現を与える。これは同時に、相手をも与える者にする。

この与える行為によって、能動的に相手と結合することによって、自分、相手、全ての人間を発見することができる。

1. 親子の愛

母親から子供への愛

母親は、子供が子供であるから、愛する。子供にとって、愛される為にしなければならないことは何もない。そしてこの無条件の愛は、子供に平安を齎すのである。

子供の中の愛の芽生え

10歳頃まで、母親の愛を受ける子供にとって、問題は専ら愛されることである。まだ自分からは愛さない。然し、以降、自分の創作によって愛を生み出す感覚が芽生える。故に子供は親に対し、何かを送ることを思いつく。

思春期には、子供は自己中心主義を克服する。自分の欲求よりも相手の欲求が大事になり、与えることに満足する。これはまさに、「愛するから愛される」という原則への転換なのである。

愛の対象の変化

産まれてから暫くは、嘗て一体であった母親に対して、子供は愛を抱く。しかし子供が独立するにつれ、子供の愛の対象は父親になる。なぜなら父親は、思考、法、秩序と言った世界を表し、子供が父親から気に入られる、愛されるには、父親の規範に従わなければならないからだ。それに成功する子供が、父親から後継者として選ばれるのである。

父親的両親と母親的両親の併有

軈て子供は成熟し、自分が自分の母であり、父である状態に達する、つまり「無条件の愛」と「規範」の両方を自分の中に持つようになる。成熟した人間はその両方によって、人を愛することができるのである。

1. 愛の対象

愛とは、特定の人間に対する関係ではない。一人の人を愛することは、その人を通して全ての人、世界を愛することである。然し乍ら、愛を向ける対象によって、その愛の形態にも種類がある。

a 兄弟愛

貧しい者、無力な者、よそ者に対する愛。あらゆる他人に対する責任、配慮、尊重、理解を伴う。表面的な違いを超えて、互いの内部の同一性を知り合う関係。

b 母性愛

母性愛は子供の生命の必要性に対する無条件の肯定である。母親は自分自身で子供を生み出すことによって、能動的な愛を発揮し、自分の人生に意味と目的を持つ。しかし母性愛は大変な難行となりうる。なぜなら、子供は必ず自立し、離れていってしまうからである。その場合、母親に要求されるのは徹底的な利他主義である。この利他主義は大変困難なので、真に愛情深い母親になるには、人類全体を愛することができなければならない。

c 異性愛

母性愛や兄弟愛は人類全てに対する愛であった。しかし異性愛には独特の排他性が伴う。なぜなら異性愛は、特定の相手と完全に融合したいという願望だからだ。つまりこれは二倍になった利己主義といえる。二人は融合しているが、それ以外の人からは孤立している。ところが、異性愛は相手の存在の本質から愛することであり、また存在の本質は、全ての人間において同一である。こうして人間は、一者を愛することによって、人類全体を愛することになるのだ。

* 相手は誰でもいい?

ここでフロムの愛に対する態度として最も重要な既述が為される。それは、愛とは「決意であり、決断であり、約束である(P91)」ということである。

|  |
| --- |
| 愛は本質的には、意志にもとづいた行為であるべきだ。すなわち、自分の全人生を相手の人生に賭けようという決断の行為であるべきだ。　　P90 |

ところが、人類全体の本質を、決断を以て愛することが、異性愛であるからといって、その愛の対象が誰でもよいというわけではないのである。

我々は皆「一者」であるが、一人一人はかけがえのない唯一無二の存在である。異性愛とは、かけがえのない相手を、本質から知ろうという、決断なのである。